

銃に追われた記憶が襲う

癒えない傷
トラウマ
刻まれた戦いの記憶

■1

沖縄戦から68年。住民を巻き込んだ地上戦は、体験者の心に深い傷、トラウマ(心的外傷)を残した。米軍基地から派生する事件や事故がさらにその傷口を広げている。戦後何十年たっても癒えない心の傷を取材した。

伊江村で暮らす平安山ヒロ子さん(77)は10年ほど前から突然、沖縄戦で亡くなった妹の内間照子さん(当時41)のことを思い出しては心臓がドキドキし、重い気分襲われるようになった。

眠れない、食べられない、体がだるい。約7年前からは、体に異変が現れ出した。這ってトイレに行く日もあった。妹のほか、防衛隊にとられ戦死した父や、米軍機が襲ってくる夢も見るようになった。そのたびに大声を出して跳び起きた。

本島北部の病院の内科はほとんど回ったが、体に異常は見つからなかった。原因が分からないまま心身の苦しさは続いた。

「このまま死ぬしかないのかな。自分で死ぬ気力はないから、爆弾が落ちたらいいのに、と思うこともあった」

何度も繰り返し思い出す場面がある。1945年4月17日の伊江島。平安山さんは9歳だった。

前日の16日、米軍は島に上陸し、日本軍の陣地がある城山に向け進軍していた。17日未明、母、弟、照子さんと4人で身を寄せていた親戚の壕が攻撃を受けた。入り口が焼かれ、大人も子どもも我先にと外へ逃げ出す中、平安山さんは日ごろ世話をしていた照子さんを起こし、背中におぶって壕を出た。

壕前の約1.5メートルの高さの石垣を、照子さんを背負ったまま飛び降りた。パン、パン、パンと容赦なく飛んでくる機銃弾が恐ろしくて泣きながら懸命に走った。しばらく走ったところで、平安山さんにしがみつ

戦場に妹が… 苦しみの歲月

いた照子さんの体がずり落ちた。

名前を呼びながらしがみ、「おんぶ、おんぶ、早く」とせきたてた。抱き起こそうにも力がない。引つ張っても、動かない。米軍が背後から追ってくる。逃げなければと、焦った。すまないと思いつつ、妹を残し、先に逃げていた人の後を追った。

たどり着いた別の壕で、先に脱出していた母や弟と再会した。そこで初めて、自分も銃で撃たれ、弾が背中を貫通し、体中が血で染まっているのに気付いた。

米軍が占領を宣言する21日まで、住民を巻き込んだ激しい戦闘は6日にわたって続いた。当時、伊江島にいた住民の半数近く、約1500人が死亡した。生き残った約2千人も収容所に入れられた。島は米軍の本拠地、撃用の基地となった。

戦闘の記憶は何度もフラッシュバックし、平安山さんを苦しめ続けた。

2007年10月、平安山さんはうつ病と診断された。

(社会部・宮城栄作)

27面に続く



平安山ヒロ子さんは「平和の礎」に刻まれた父と妹の名前をえんぴつでなぞった写しを額に入れて大切に取っている。伊江村の自宅

戦の悪夢 体に異変

癒えない傷

刻まれた戦の記憶

トラウマ

1面から続く

2006年ごろから不眠や倦怠感に悩まされるようになった平安山ヒロ子さん(77)＝伊江村。07年10月、琉球大医学部付属病院の精神科神経科を初めて受診した。睡眠薬や抗うつ剤を処方された。

薬を飲み始めてから4、5日後に症状が改善し始めた。ご飯がおいしく感じられ、眠れるようになった。受診の2カ月後には、伊江島に帰れるまでになった。

今でも、朝は頭が重いなどの症状があり、体調に合わせて薬を飲みながら生活を続けている。月に1度、フェリーで本部町の病院に通う。調子が悪くなるサイクルも分かるよう

になり、「少しずつ良くなってきた」という。

■ ■
昨年6月、デイサービスを通じて、沖縄戦が体験者の心に及ぼす影響を調べる沖縄戦トラウマ研究会の調査を受けた。トラウマ(心的外傷)の程度を測るテストでは、心的外傷後ストレス障害(PTSD)が疑われる基準値を大きく超えていた。

同研究会の富山屋士子代表は「調査中、つらそう途中で何度も面接を中止しようと思った」と振り返る。沖縄戦のトラウマからPTSDになった高齢者を診てきた蟻塚亮二医師を紹介した。



沖縄戦で失った妹のことを話す平安山ヒロ子さん＝伊江村の自宅

救えなかった妹 苦悩今も

蟻塚医師は「仕事を引退して心に余裕ができてから、戦争のトラウマが抑えられなくなり、不眠などのうつ症状を引き起こした。明らかに戦争PTSDだ」と指摘する。薬で体の症状が改善しても、平安山さんの心の傷が癒えたわけではない。

■ ■
あの時、自分もつと年長だったら助けられたのでは。妹から離れず残ればよかった。「自分は鬼のような人間なのだろうか」と責めることもある。「妹を置いて逃げたことを悔やんでも悔やみきれないんです」毎月1、15日には弟の家に出掛けていって仏壇に手を合わせる。妹が食べられなかったお菓子を供えて「ごめんね、ごめんね」と繰り返す。

■ ■
伊江島では戦後も、米軍船の爆発事故や、不発弾を捨てた住民が爆死するなど、米軍がらみの事件・事故が相次いだ。今はオスプレイが昼夜を問わず訓練し、騒音で悩ませる。テレビや新聞で米軍機を目にするだけで、思い出して苦しくなる。

■ ■
「病気をあの世まで持っていくことになると思う」と平安山さん。「戦争中から今まで、苦しみながら生きている人がいることを、偉い人たちは知ってるだろうか」

(社会部・宮城栄作)



2

進字で自宅を離れ、夫と2人の暮らしたが始まった時だ。「子育てを整形外科で2度手術。中国まで出かけ、漢方薬やはり・きゅうに頼ったが痛みは消えない。医師も頼ったが痛みは消えない」と言昔、70代を間近に夫を去り、「子どもたちに迷惑を掛けたくない」と自殺が頭をよぎった。

2007年、娘の勧めで心療内科に通った。3年後、塚塚亮医師が沖繩戦PTSD(心的外傷後ストレス障害)と診断、「戦争の影響と聞き、楽になった」といっ

足の裏を火であぶられたようなジリジリとする痛みは、太もも、上半身へ広がり、耳の中や頭に達する。豊島市の内原つる子さん(83)は、30年以上苦しめられたこの痛みを、沖繩戦で死体を踏んづけた「天罰」と受け入れてきた。

症状が出たのは48歳。娘2人がいれがあった。が、痛みには耐え

足裏の痛み「天罰」

募る悔恨 続く不眠



3

戦の記憶だ。

1945年4月。前川さんが暮らしていた南部地域は連日、米軍の激しい艦砲撃にさらされていた。13歳だった前川さんは両親と兄弟の家族6人で、自宅がある旧玉城村から現在の糸織市伊原方面へと逃げた。その途中、民家の敷地内の木の下で休んでいたら、40歳の妹のハツ子さんが腹に被弾し、内臓が出たままぐったりして眠れぬ夜、雲に浮かぶのは油縄

1945年4月。前川さんが暮らしていた南部地域は連日、米軍の激しい艦砲撃にさらされていた。13歳だった前川さんは両親と兄弟の家族6人で、自宅がある旧玉城村から現在の糸織市伊原方面へと逃げた。その途中、民家の敷地内の木の下で休んでいたら、40歳の妹のハツ子さんが腹に被弾し、内臓が出たままぐったりして眠れぬ夜、雲に浮かぶのは油縄

死体踏み 今も感觸



「同じように悩む人たちのために冲縄PTSDを研究したい」という織塚亮医師の考えのもとと取材に応じた内原つる子さんと取村三那子(手前) 同市沖繩協同病院

次第に足の裏の痛みは薄れ、杖なしで歩けるようになった。沖繩戦体験者2人の「患者ミナイン」で死体の腹を踏んだ。足の裏にびびり、足の裏の感觸がよみがえった。「年を重ねるごとに悲惨な体験を思い出す苦しさ、足の痛みになかった。今ではそう考えられている。

織塚医師は「内原さんはじめで厳格な性格。天罰と悩んでいたが、沖繩戦トラウマという言葉を知り、自分なりに合理的に受け止める楽になったと思う」。

内原さんは今も心療内科に通っている。その場で半座し、「何かの役に立つなら」と臨床心理士めんなさい、「ごめんなさい」と何の立ち会ひのもし、体験を語って



家族の最期 忘れぬ

豊家は3代続いたサトウキビ農家。戦後は養豚も始め、75年に酪農に転じた。朝、夕の搾乳は欠かせず、正月も休みなく働き続け、男女6人の子を育てあげた。75歳で家業を息子に継いだ2008年、眠れない日々が始まった。引退し、体が疲れないからだと軽く考えていたが、不眠は続く。朝起きられず、一日中、体がこわす口もあった。「この先、体はこなるんだろ」と不安に襲われた。内科で睡眠薬をもらったが、原因は分からなかった。動められて3年前に心療内科に行くけど、PTSDの不眠の記憶に悩まされている川守幸さん。沖繩の皇宅

教師時代、6月になると平和学習で自分の体験を語った。そのたびに足の裏の感觸がよみがえった。「年を重ねるごとに悲惨な体験を思い出す苦しさ、足の痛みになかった。今ではそう考えられている。

織塚医師は「内原さんはじめで厳格な性格。天罰と悩んでいたが、沖繩戦トラウマという言葉を知り、自分なりに合理的に受け止める楽になったと思う」。

内原さんは今も心療内科に通っている。その場で半座し、「何かの役に立つなら」と臨床心理士の立ち会ひのもし、体験を語ってくれた。(社会部・福元大輔)

1945年4月。前川さんが暮らしていた南部地域は連日、米軍の激しい艦砲撃にさらされていた。13歳だった前川さんは両親と兄弟の家族6人で、自宅がある旧玉城村から現在の糸織市伊原方面へと逃げた。その途中、民家の敷地内の木の下で休んでいたら、40歳の妹のハツ子さんが腹に被弾し、内臓が出たままぐったりして眠れぬ夜、雲に浮かぶのは油縄

毎年6月 心が騒ぐ



名護市牟茂佐の特別養護老人ホームからゆいぬ村で21日、沖縄戦の戦没者追悼式「平和の祈り」が開かれた。入所者は正生の時報を合図に、しわが深く刻まれた手を静かに含わせた。

定員100人、平均年齢83歳

約8割が認知症。以前は糸満市摩文の平和の礎まで足を運んでい

だが、移動中に体調を崩すことがあり、5年前から施設内で開催している式には希望者が参列した。

目になると、落ちて着かず、「足音

が聞こえる」(93)は焼着後、

ぼく目を閉じた。国吉さんは19

歳で旧陸軍に入隊、中国へ渡った。

夜中にベッド上で座り込み、「戦

争の夢を見て、眠れない」と訴え

ることがある。

ニューギニア方面で日本軍の航空

死体から奪った水筒の水のどの

整備士だった夫を亡くした。「慰

霊の日に戦争を思い出し、苦し

くなるが、手を言わせると心が楽

になる」

沖縄戦を体験した入所者は、6

月になると、落ちて着かず、「足音

が聞こえる」(93)は焼着後、

ぼく目を閉じた。国吉さんは19

歳で旧陸軍に入隊、中国へ渡った。

夜中にベッド上で座り込み、「戦

争の夢を見て、眠れない」と訴え

ることがある。

ニューギニア方面で日本軍の航空

死体から奪った水筒の水のどの

整備士だった夫を亡くした。「慰

霊の日に戦争を思い出し、苦し

くなるが、手を言わせると心が楽

になる」

体験語れる場 必要



若い職員は過去を理解して対応するよう言いつけている。

一医師(66)は、高齢になってから

沖縄戦上ライ研究会の鎌塚亮

TSD」と呼ぶ。

ただ、高齢者福祉の現場では沖

縄戦との関連を意識しつつも戸惑

いもある。

本部町のもじり記念病院に18年

務める作業療法士の前田瑞穂さん

で接し方が変わる」と強調。特に

沖縄で高齢者と話す場合は

きのドアに向かって公壇のように

拝む高齢者を見て、「戦争の心的

外傷後ストレス障害(PTSD)

鎌塚医師は「若いこの痛みを

胸にとどめると先鋭化する。家族

なと身近な人は高齢者を大切に

る。

しかし、認知症の症状にも似て

て、戦争体験を語ってもいまだ

い環境をつくり、理解してほし

い」と期待した。

戦没者に手を言わせる「かりゆいぬ村」

の入所者と地域住民ら21日、名護市牟

茂佐

に悩んだりする事例を「晩熟性PTSD

まではいかない」。

沖縄協同病院の臨床心理士、原

國ゆりこさん(31)は、同研究会の

調査に参加して考え方が変わって

きた。患者の症状だけを聞くので

はなく、「歴史、背景を知ること

務める作業療法士の前田瑞穂さん

で接し方が変わる」と強調。特に

沖縄で高齢者と話す場合はきの

社会部・福元大輔

おわり



ウチナー新喜劇で、膝の痛みの原因が分かり、踊り出すウシさん（左から2人目）と、「人間旗頭」で盛り上げる家族ら＝15日、那覇市のパレット市民劇場

FEC「お笑い米軍基地9」

PTSD 笑いで癒やす

演芸集団FECは15日に開幕した沖縄本島縦断「お笑い米軍基地9」の中のウチナー新喜劇で、沖縄戦の心的外傷後ストレス障害（PTSD）を取り上げた。戦後68年たっても生々しく残る記憶、癒えることのない心の傷。「戦争を知らない世代が、どう向き合えばいいか」。笑いの中に、大きな問いを投げ掛けている。（福元大輔）

沖縄戦の記憶 あえて喜劇に

9年目を迎えた「お笑い米軍基地」は、基地の過重負担をコントのネタにして、笑いに変えてきた。戦中、戦後の苦難を乗り越え、明るく過ごす沖縄の人の強さが根底にあるが、企画・脚本・演出を担当する小波津正光さん（38）は昨年のテレビ番組で沖縄戦PTSDを見て、「笑いで解決できないことを知り、根底が覆された」と振り返る。



小波津正光さん

ただどる
つなぐ
戦後68年

新喜劇では「阿波根食堂」のウシさんが原因不明の膝の痛みを苦しむ。家族の心配をよそに症状は悪化し、歩行も困難に。そんな中「話を聞くのが治療」という医師に、沖縄戦の体験を打ち明ける。

「隠れていたガマで手りゅう弾が爆発し、7歳の長男、4歳の次男が即死した。助かった私は、暗いガマから逃げだそうと横たわる長男、次男を踏みつけた。あの時の感触が足の裏に残る。笑えば嫌な記憶もなくなると思っただが、あの戦争はいつでも私を苦しめる」。そしてウシさんは言う。

「笑いは戦（いくさ）に勝てない」

それでも、小波津さんが解決策として脚本に書き込んだのは笑いだった。心の傷を知った子や孫がウシさんを元気づけようと6月23日を「お笑い慰霊の日」にすることを企画。ごちそうを並べ、ウシさんがカチャシーを舞う場面で、幕が下りた。

「体験者が減る中で今後にも『慰霊の日』を続けるには、清明祭や旧盆のような楽しい要素が必要では」という僕なりの提案です」と

小波津さん。若い世代がっらい体験を聞き、忘れず、継承する意思を示すことで、おしい、おばあさんの傷が少しでも癒えるのではないかと信じている。